

## モンスーンアジアにおける農業環境研究の推進 —国際ネットワークによる重要課題の解決を目指して—

(独) 農業環境技術研究所 理事長 宮下 清貴



「モンスーンアジア」はアジアの中のモンスーン気候下にある地域で、ほぼ東アジア・東南アジア・南アジアに相当します。温暖で湿潤な気候など、農業生産のための自然資源に恵まれたこの地域では、生産力の高い水田稲作が食料生産の中心として持続的に営まれ、世界人口のほぼ40%の人々が生活しています。一方で、近年この地域は世界で最もめざましい経済発展を遂げており、人口増や経済発展にともなう食の変化、バイオエネルギー作物生産などにより、農業生産に対する需要が急増しています。その結果、森林の開墾や都市化などによる土地利用の変化、鉱工業由来の化学物質による農地の汚染、化学肥料や農薬の過剰使用による水質の汚染、生物多様性の喪失、さらには温暖化等の環境変動など、深刻な農業環境問題に直面しています。

環境問題の多くは時間と空間を越えた広がりをもっており、根本的な解決のためには国際的な取り組みが必要です。特に自然条件や文化で共通性の高いモンスーンアジア地域の研究機関・研究者が国際的に協力し合うことは、大きな意義があります。農環研では以前からこれらの地域の研究所や大学と、情報交換や共同研究を進めてきましたが、既に多くの環境問題を経験してきた日本に対する期待は大きいものでありました。

こうした背景のもと、農環研は、2006年開催した国際シンポジウム「モンスーンアジアにおける持続的農業のための農業資源の評価と有効利用：国際研究協力に向けて」において、モンスーンアジア農業環境研究コンソーシアム (The Monsoon Asia Agro-Environmental Research Consortium : MARCO) の設立を提案しました。この時採択された設立声明では、モンスーンアジア

地域における農業生態系を健全に維持しつつ持続的な発展を実現していく上で、農業をめぐる環境の諸問題の解決が急務であること、そのためには地域内における各国の農業と環境に関わる研究者・技術者・行政担当者などが密接な連携の下に一体となって問題の解決にあたることが重要であることがうたわれています。MARCOは発足以来、大型のシンポジウムとテーマを絞ったワークショップの開催、研究者の派遣・招へいやウェブサイトを通じた情報交換などを軸に活動展開し、現在、9カ国から18の大学・研究所が参加するに至っています。2012年9月にはつくばで、MARCOシンポジウム2012を開催し、この間の農業環境研究の進展と現状、今後の展開方向などを明らかにし、連携の強化を図りました。

温暖化の影響と考えられる洪水や干ばつの頻繁化など、農業を巡る環境問題は深刻さを増しています。世界が科学においてもグローバル化を加速する中、MARCOを介してモンスーンアジア地域の多彩な知の交流をはかり、人類に課せられた重要な農業環境問題の解決にむけて研究開発を加速していきたいと考えています。